

日本における自然についての小考

東海林 克也
SHOUJI Katsuya

1. はじめに

東日本大震災を経験し、地球に住む我われは改めて自然との関係について捕え直す必要がある。

科学技術が発達し、常に合理的判断や行動が求められる現代社会に生きる人間にとって東日本大震災は忘れ去られた「自然との人間の付き合い方」を改めて考える契機になったのではなかろうか。特に老年世代の人たちからは「地球が怒っている」とか「自然を壊しすぎた罰」といった言葉が聞かれた。このような言葉からも自然に対して何らかの後ろめたい思いがあるのではないか。戦後、自然とのかかわりを持ちながら日本文化は「野蛮な文化」「前時代的遺産」としてないがしろにされてきた。だが、先の東日本大震災、深刻化する環境問題の中で外国人の方から自然との繋がり方、日本の自然観や自然を中心とした神道などに対する注目が年々増えている。

しかし、「自然」について考える際に難しい問題がある。それは「自然（しぜん）」という言葉自体が明治時代からの「翻訳語」であるということである。つまり明治以前の生活環境の中に存在していた日本における「自然（おのずからしかり）」と「自然（nature）」ではニュアンスが微妙にちがうと考えられる。そのため本論文では、日本における自然観について検討した。

第2章では日本における「自然（おのずからしかり）」と翻訳語の「自然（nature）」の相違点について述べた。

第3章では自然と災害をテーマに自然災害の起きた場所の地名や歴史を振り返り『続日本紀』⁽¹⁾を使用し日本の自然災害について述べた。

第4章では日本の自然とのつながりについて『万葉集』⁽²⁾などを使用し、我われ日本人が古代において自然とどのような関係を持っていたのかについて述べた。

2. 翻訳語の問題点

日本語と翻訳語の微妙なニュアンスの違いというものは、社会の中では大きな意味の違いになってくるのではないか。柳父章はグラスを例えにしてあげ日本人と外国人から見た違い⁽³⁾がありこれが文化理解の大きな障害となる可能性がある。

つまり、文化（考え方・捉え方）が異なる場合は、微妙な意味の変化が起こると考えられる。

特に明治期における多量な外国語の受容やすり合わせによって、当時の日本文化・思想が大げさに言えば破壊されてしまった可能性が考えられる。

例えば「宗教」がそのたれとしてあげられるだろう。欧米文化からみて宗教とはキリスト教であり、神道・仏教やその他宗教も宗教であると考えられる。

しかし、日本人にとって神道・仏教といった生活に非常にかかわりの深い宗教に関しては「宗教なのか」「宗教ではないのか」という議論がたびたび巻き起こる⁽⁴⁾。

だが、一方で日本文化の特徴のひとつは、翻訳語受容の文化（異文化の受容）ともいえるのである。古代において遣唐使・遣隋使を通して大陸との文化交流があり、538年には仏教が大陸から伝来し異文化受容のはしりとなった。仏教は当時「蕃神（隣の国の神）」と呼ばれ日本の神と同列に扱われていた。その後、神道と仏教が混じり合い「神仏習合思想」として、明治元年の神仏分離令によって神社（神道）と寺院（仏教）が切り離されるまで生活に密着した信仰（思想）であった。また朱子学や蘭学の受容は近代日本文化の成立に大きな影響を与えている。このように日本の文化・思想というものは外国の文化・思想の影響が少なからずある。

けれども、明治時代とそれ以前の翻訳語（異文化）の受容は大きく異なっているように思われる。それは「国家主導による短期間による文化の強制受容」の有無ではなからうか。

明治以前の異文化の受容としては遣隋使や遣唐使がたとえとして挙げられるだろう。そのどちらもが当時の先進国であった隋・唐の文化・技術や仏教經典の収集が主な目的であった。しかも600年（推古8年）から894年（寛平6年）までの約300年という長い年月をかけて日本文化とのすり合わせ・融合や受容をしたうえで日本に根付いていった文化である。この長い年月ということが当時の日本文化と外国文化の軋轢や日本文化の破壊が少なかった要因と考えられる。

だが、明治時代の外国文化受容は短期間のうちに行われた。明治時代の日本は、脱亜入欧というスローガンのもと、外国文化（西洋文化）をどんどんと受け入れていった。

その背景にあるのが西欧諸国によるアジアの植民地化にある。そのための対抗策として産業の育成や資本主義国家への移行という殖産興業政策や経済の発展および軍事力強化という富国強兵政策が根底にあった。それは、「西洋のものなら何でも良い」との考えになり西洋化＝近代化の図式になり西洋至上主義ができあがる。

この思想や政策が土台となり鉄道の開業・富岡製糸場の設立・日本初の西洋式官営八幡製鉄所が開業する。

このような出来事がわずか34年間の間に起きたことは文化受容にとっての「無理」が生じ、日本の伝統文化が少なからず打撃を受けたことは明らかであろう。

本論文で取り上げている「自然」以外にも日本の民衆信仰など日本のローカル思想や外国語の受容によってできた言葉や文化について考える場合、日本では本来どのような意味を持って使用されていたのかを整理していかなければ、本質が見えないのではないだろうか。

3. 自然と災害

日本に住む人々にとって自然環境は生活環境を向上・安定させ「五穀豊穡」という恵みをもたらすものであった。しかし自然は「恵み」だけをもたらすものではなかった。自然は時として人間に牙をむき人々を絶望の淵へと突き落とす。

日本は地理的条件として四方を海に囲まれた島国であり、国土の7割が山岳地帯であることから見ても常に自然環境と密接なかかわりを持っている。

そのため古くから自然災害に見舞われ不安定な生活を送っていたと考えられる。

自然に囲まれた島国である日本で生活するうえで自然災害は決して免れるものではない。我われ人間は災害を防ぐことができない。ましてや雨を降らすことも、止めることもできない。どのような科学技術が発達しても自然とのかかわりからは逃れることはできない。

近年の大災害を振り返ってみれば明らかである。1995年（平成7年）1月17日に発生した阪神・淡路大震災をはじめ、2007年（平成19年）7月16日に発生した新潟県中越沖地震や、2008年（平成20年）6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震、今尚復旧・復興の道半ばである2011年（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災、2014年夏に発生した広島土砂災害などの大災害から、台風などによる大雨・洪水、猛暑・冷夏などによる水不足や作物被害など常に日本は自然による被害を受けている⁽⁵⁾。

このように自然は様々な災害をもたらしてきた。そのため人々は自然災害を伝説・伝承や遺跡として後世に伝えようとし防災・減災に努めてきた。さらに災害にちなんだ地名を残し災害の危険を伝えようとしている。

太宰は自然災害などが多く発生した場所について「危険な場所には本来、その危険を知らせる地名がついていた」と述べ、氏はさらに岩手・宮城内陸地震で崩壊した地名をまとめている⁽⁶⁾。

また、古代においても天災における自然災害やそれに伴い飢饉・疫病が多発したことが歴史書の中に多く記載されている。例として平安時代初期に編纂された史書で延暦16年（797年）に完成した六国史⁽⁷⁾のひとつである『続日本紀』をあげることができる。『続日本紀』の内容は文武天皇元年（697年）から桓武天皇延暦10年（791年）までの歴史が記述され、奈良時代を知るうえでの基本的史料と理解されている。その『続日本紀』にも自然災害に関する記事が多く見られる。安田政彦氏も自然災害の記事に関しては述べている⁽⁸⁾。以下『続日本紀』から何点か抜粋し記載する。

「文武天皇元年（697年）閏12月7日国に飢饉が起きたので、食料を与え負税の取り立てをやめさせた。」⁽⁹⁾

「文武天皇大宝元年（701年）8月21日大風が吹き民家が損壊秋の収穫に被害が出る。」⁽¹⁰⁾

上記のような災害記事を見ることができる。このような自然災害による食糧被害や住居空間の被害は、現代だけの出来事だけではなく古代にもあった。すなわち、人間が生きる現実世界の中では人間の力だけでは解決できない物事が多くあったと見ることができる。

加えて、奈良時代に起きた藤原広嗣の乱（740年（天平12年））を契機に多くの遷都が行われた。平城京から遷都された恭仁京（741年（天平13年））、紫香楽宮（742年（天平14年））、難波宮（744年（天平15年））と短期間での遷都が実施されている。この遷都騒動に関して安田政彦氏は「この度重なる遷都騒ぎは誰の目にも不自然であり当該期におこった激しい地震であるがゆえに、人々は天譴を恐れ、天皇も何らかの詔を出した可能性は高いであろう」と述べている⁽¹¹⁾。このようなことから、自然災害による社会的不安が天皇、朝廷をはじめ民衆にもおよんでおり、自然災害が織りなす天災に恐れを抱いていたと見ることができる。

以上のように、日本は古くから現代にいたるまで常に自然災害と共に生活をしてきた事がうかがえる。

4. 日本における自然とのつながり

前述したように日本で生活を営むということは自然（災害）と密接な関係を持ちながら生きるということである。しかし、自然は人間に災害を与えると同時に生きる恵みを与えてくれる。人間が生きること、生活すること自体、自然を無視し切り離して考えることはできない。

自然と共に生きる我われであることを考えてみれば当たり前のことである。人間は人間だけでは生きていけない。我われは水の一滴ですら自然を離れた自分たちで生み出すことができない。動植物の存在がなければ食料とすることもできない。空から雨が降り山に留まり、木々を育みやがて川・海へ流れ魚が生息する状況になる。木々は大小様々な動物を育むのである。

このような考え方は西洋特にキリスト教的自然観との違いが見られ、人間と自然とのかわりは日本とはかなり異なる。西洋における人間は自然よりも上の立場にあり、人間には自然を支配・利用する権利があると考えられていた。このようなキリスト教的自然観をもった西洋の自然とのつながりの中で人間は自然を「征服」する対象とみてきた。例えば登山などの場合を考えると分かりやすい。登山では山頂にたどり着いた時に「山を征服した」という表現が度々使われるように山（自然）は征服の対象であった。

キリスト教の世界観から見ると万物は神によって造られ最後に神の姿に似た「人間」を造った。人間は神以外において最も上位にあり人間よりも下位にある自然に神（精霊）が宿る（神になる）ということは考えがおよばなかったのではないだろうか。

同時に古代の人々は山・川・海・森林・樹木・石・岩石をも神としていた。そこではすべてにおいて自然に畏怖の念・畏敬の念をいだいていた。そのような感情を持っていた古代人にとって「自然を征服する」という思想は伴わなかったのであろう。さらに荒川は記紀神話の中でも「物」からさまざまな「自然」や「神」が生まれていることを述べているように⁽¹²⁾、自然は神と同一視されていたであろう事が分かる。

農耕中心の生活をしてきた古代の日本人は人間の力が及ばない自然に対し、神と自然はイコールであった。「畏怖」「畏敬」を感じとり人間の無力さを知っていたがゆえに

「自然を操ること」や「征服する」ことを考えなかったのではないか。

我われは、自然を認識する際に四季という無常のサイクルが繰り返されること、山川草木の包括的な姿を生身の肉体で感じる事が農耕であり、自分自身に命があるように自然にも命が宿っていることの認識につながるのである。美しい自然、生命の源である自然に対して喜びや感動を感じる一方で、大風・大雨・早魃・地震・噴火といった不安や悲しみを感じるという二面性を持っておりその不可思議な二面性に畏怖の感情（もしくは畏敬の感情）を覚えたであろうことは間違いない。

このような自然とのかかわりは当時の生活が農業や漁業を中心としたものであり、自然と密接なかかわりを結んでいたためであろう。柳田は日本の祭りについて、自然から得た収穫物を神に感謝し（収穫物を神に捧げる）神と同じ食べ物をいただくことが重要であると述べ、祭りの意義を「特に高尚なる消費活動である」と論じている⁽¹³⁾。人間の力のみでは決して手に入れることのできない収穫物を与えてくれる自然（神）に感謝と祈りを捧げることは当然であったと考えられる。

自然は常に変化し、同じ環境は一度たりともなく不一定的のものであることは先に述べた通りである。この不一定的の毎日が人々に与える感情としての「季節の感情」を芽生えさせる。

「季節の感情」は当時生活の中心であった農業と深いかかわりがあった。農作業を行う過程で花が咲くのを見て、花が散り新緑の季節になり、葉が舞い散るのを見ながら「春夏秋冬」という自然の変化（無常）を肌で感じていたであろう。これは人々の生活環境と自然が密接につながっていたあかしであろう。

自然は農業とのかかわりだけではなく人の一生とも深いかかわりを持っていた。人は赤子として生まれ子供、大人と成長していき老人となって死んでいく。常に人は変化していき自然と同じように一定の年齢で成長が終わってしまうことはない。

また、古代の社会的不安、地震災害、飢餓、早魃など、自然災害は人々の生活環境に対する不安や精神的不安を与えていた。このようなことは『万葉集』⁽¹⁴⁾にも見ることができる。

生活不安の思いとして『万葉集』の中に山上憶良の「貧窮問答歌」がある⁽¹⁵⁾。「世の中をつらく人に対してもきまり悪く思っているが、鳥ではないから飛びたつこともできない。」⁽¹⁶⁾というのがいわんとするところである。当時の人々が天災を中心とした社会的不安や生活環境不安（生活苦）が現在では想像できないほど過酷な環境であったことであろう。

古代の自然観について中西進は「山や海を人間の色に染め上げる以前のものとして、いわば自然そのものとして自然を見ようとするものが自然観の基本にある」と述べている⁽¹⁷⁾。さらに中西は「海や山を我々は「自然」と呼ぶが「自然」という言葉は天地自然を表す言葉としては『万葉集』には出てこない。自然という言葉あるが、これは「おのずから」という意味でたった1つ使われており、それ以外の天地自然を表すものではない」と論じている。なお、中西進は『万葉集』の歌の中に見られる「たなびく霧」「立つ雲」の語に着目し霧は人の呼吸（嘆きの呼吸）であるとし、「霧や雲は人間の生命と相通のもの、あるいは交換可能なもの」と指摘しており⁽¹⁸⁾、自然と人間の関係について論じている。

さて、ここに出てきた「自然」と「おのずから」という言葉について少し考えてみたい。

まず自然についてであるが『広辞苑』⁽¹⁹⁾では「おのずからそうになっているさま」「人類の力を超えた力を示す森羅万象」「あるままのさま」「人の力では予測できないこと」と記されている。また『岩波哲学・思想事典』⁽²⁰⁾では「おのずからの状態を示す形容詞・副詞」と書かれている。

次に「おのずから」について見てみると『広辞苑』では「ありのままのもの」「自然に」となっている。『岩波哲学・思想事典』には「おのずから」の語句については書かれていなかった。これらのことをまとめてみると、自然とは「人間の力の及ばない現象を全てであるがままに受け入れる」ということと理解できる。

つまり我われ人間は自然災害という負の部分があるが、自然と離れて生活することはできないことは明白であろう。それは「自然＝おのずから」と言われるように自然現象は人間にとって受け入れるしかなかったのである。自然（自然現象）は人間の力を超えたものであり、その結果はどうすることもできないことと受け止めて生活していたのだろう。

5. まとめ

本論文では日本において人と自然がどのようなつながりを持ち感じていたのかについて考察した。その理由として筆者が東日本大震災を直接仙台市で被災したことが大きなきっかけとなっている。さらに自然災害が頻発するなかで、我われが自然をどうとらえていたのかということを知らなければならないと感じた。おりしも震災や昨今の環境問題の解決策として「自然とのかかわり」についてのテーマが国内外から大きな注目を集めている。

特に日本の場合、人と自然のつながりを切り離して考えることはできない。古代から日本に住む人々は稲作や漁業など自然と共に生きてきた。さらに瀬古は『日記』『万葉集』『古今集』などをふまえながら「自然の中にも人生を見、人生の中にも自然を度外視することのできなかったわれわれ日本人の生活態度を反映しているのではないかと考える」と述べている⁽²¹⁾ように文学とも深いかかわりを持っている。文学だけではなく、共同体における信仰や祭り、職人集団の信仰などもある。さらには自然信仰が土台となっている神道や仏教が伝来し定着したのも自然信仰と切り離せるものではない。

初期の神社は社殿がなく自然の山や岩などを御祭神としており、現在でも大神神社が三輪山そのものを御祭神として祭っている。また、自然との関係が課題となっている中で、自然への畏怖・畏敬、土着的な自然信仰に対する意識や多神信仰が重要になってきている。

天台宗の開祖である最澄は「山川草木国土悉皆成仏」（山や川や草や木、国土に至るまですべてが仏になれるという意味）とのべ空海は「森は人の世はもちろん、天上の世界よりも美しい」と述べている。仏教の山岳修行についても山に精霊や神が宿って

おり神秘的な思想（感情）は仏教が伝来した後も途切れることなく続きながら山が修行の場になっていったことも理解ができるのではないだろうか。

ところで、日本の自然を考える上で大事なところは日本の「自然（おのずから）」と翻訳語の「自然（nature）」の違いである⁽²²⁾。日本では明治時代の西洋文化受容までは自然はおのずからと呼ばれており、自然物そのものだけではなく生活サイクルや状態そのものが自然＝おのずからであった。しかし、明治維新後に翻訳された nature は自然（自然物）の意味であり、日本のおのずからとの意味が大きく違うのにもかかわらず受容され日本本来の思想である「おのずから」が「自然（nature）」として今に至るまで定着している。本稿では翻訳語の問題点、自然との関わり方や日本文化を改めて論じる際には翻訳語として定着した語や現代的思考だけでは、物事についての本質というのは見えないではないかということ論じた。

次に自然と災害の関係についてのべると、日本の自然環境は「五穀豊穡」という恵みをもたらすだけではなかった。現代においては東日本大震災をはじめとする大地震、山の噴火、毎年のように起こる台風災害、冷夏、猛暑、暖冬による作物被害などさまざまな自然災害が起こっている。

古代においても例外ではなく、『続日本紀』やその他の歴史書からも災害記事を見ることができる。このような記事から読み取れることは、我われ人間が生きる世界には人間の力では対処できないことがたくさんあったということである。しかも自然災害による社会的不安や生活不安が天皇、朝廷、民衆にまでおよんでいたことが分かる。

それらをふまえて日本の自然と災害について考えると、古くから自然には「五穀豊穡」をもたらすと同時に社会不安や生活不安をもたらすものであった。さまざまな自然災害にあいながらも先人は自然と共に生活していたと理解することができる。

最後に、日本における自然とのつながりを考察するとまず見えてくるのが、人間と自然は切り離して考えることはできないということである。人が食べる食事は、その全てが自然からの頂きものであり人間の力のみでは食事をすること、つまり生きることができないのである。このような自然は人の力ではどうしようもできない事を当時日本に住んでいた人々は農耕や漁業を通し体得していたのであり、自然に対して畏怖の念・畏敬の念を抱いていたのである。

一方でキリスト教的な自然とのつながりは日本のものとはかなりの違いがある。人間を含めた万物は全て神の創造物であった。そのなかで、人間は神に似た姿を持つという特別な扱いであった。このような背景があり、人間は自然を自由に使えるという考えが生まれ人間は「自然を征服する」との思想が生まれる。同時に自然崇拜（信仰）することは野蛮であり未開社会の原始的な考えという日本とは逆の思想が生まれる。

しかし『古事記』『日本書紀』の神話によると物から神・自然が生まれ神と自然が同列に扱われている。つまり、自然も神も区別されることなく同列にあつかわれていたと考えられる。この神観念を本居宣長は以下のように述べている。

何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦^か傲^みとは云うなり、すぐれたるとは、尊きこと善きこと、功しきことなどの、優れたるのみを云に非ず、悪きもの奇しきものなども、よにすぐれて可畏きをば神というなり⁽²³⁾

このように、尋常ではないすぐれた能力を持ち（人に）畏敬・畏怖を起す物を「神」という。尊い・有効有能というだけでなく、わけの判らない悪奇・怪異であつても、世にあれば神という。これは、日本独特の神観念であることが理解できる。

前述のように、自然と神はイコールの関係、同列のあつかいであり畏怖の念・畏敬の念を感じとり、さらに我われ人間の無力さをも認識していたのである。そのため自然を人の力で操ることや征服するという考えにはならなかったと推測できる。

以上のような自然観や神観念をみると、自然は五穀豊穡をもたらすというプラスの面があると同時に自然災害というマイナスの面をもたらすのである。災害がいやだからと言って自然から離れては生活ができない事を認識していたのだ。しかも自然は人間の力で操ることも征服することもできないのである。それはこれが自然＝おのずからにつながるのである。

現在、日本において自然とのかかわりについて改めて見直す機運がある。しかし日本の自然観を考えることはかなりの難しい面がある。先に述べたように翻訳語の問題、文学、信仰、社会システムや日本人の感覚的なもの全てに日本の自然観が入っており、自然を切り離して考えることはできないのである。同様に家永は思想史研究の立場から宗教的自然観の研究意義について自著の中で述べているので引用する。

宗教と云い、救いと云い、既成宗教のそれのみを指すとあらばそれにてやむ、若し真に日本人の魂に救いを与へたものを追求しようと云う意味の於ての日本宗教思想史を考える時、単に神道仏教キリスト教のみを取り上げて、それらより一層日本的であり一層深い境地に達したこともあるこの「自然」の救いを度外視するならば、我が国民の真の精神的展開を跡付けることは出来ないであらう⁽²⁴⁾。

上記のように、家永は成立宗教のみを単独で研究しても日本人の宗教性の本格的な解明にはつながらず、宗教的自然観こそ研究しなければならないと指摘した。

自然とのかかわり、つまり自然信仰を含めた日本人の精神性を研究することが、日本文化研究やグローバル化社会の中で日本とは何かを語るうえで今後重要になっていくことは間違いないだろう。

今後の課題として本稿では西洋的自然観を考察し日本との比較検討、現代を含めた自然観が時代ごとにどう変化していったのか、日本における自然災害の受け止め方などさまざまな課題が筆者の力不足や枚数の都合上残されてしまったが、今後も継続して研究することが重要である。

■註

- (1) 宇治谷孟、1992、下巻のみ 1995、『続日本紀（上）（中）（下）全現代語訳』講談社
- (2) 久松潜一、1976、『万葉秀歌』講談社
- (3) 柳父章、1995、『翻訳の思想—「自然」と NATURE』筑摩書房
- (4) 宗教という語も明治時代の翻訳語であるという研究が定説であり多くの研究があるが本稿では特に詳しく記述はしない。

- (5) 明治以前までは自然災害をおのずからのものと受け止めていた。しかし、明治維新後セメント工場が誕生し戦後コンクリートが使用されるようになった。明治以前の自然と共生し神が宿ると信じられてきた世界から自然に打ち勝つことのできる世界に変化し始めた。東日本大震災が起こるまでは自然に勝つ、自然を人間の力で変えられるという思いがあったのであろう。だが震災以降、自然災害と闘うのではなく減災という自然の力を認めながら被害を減らしていくという方向に向かっている。
- (6) 太宰幸子、2013、「自然災害と地名地震と津波から」谷川健一編『地名は警告する』富山房インターナショナル所収
- (7) 古代日本の律令国家が編纂した歴史書のことで『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『文徳実録』『三代実録』の6つがある。
- (8) 安田政彦、1996、「『続日本紀』にみえる地震記事」『続日本紀研究』第300号所収、続日本紀研究会
- (9) 宇治谷孟、1992、『続日本紀（上）全現代語訳』から抜粋
- (10) 宇治谷孟、1992、『続日本紀（上）全現代語訳』から抜粋
- (11) 安田政彦、1996、「『続日本紀』にみえる地震記事」『続日本紀研究』第300号所収、続日本紀研究会
- (12) 荒川紘、1995、「記・紀創世神話における自然」伊藤俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社
- (13) 柳田國男、1962、『柳田國男集』第7巻、筑摩書房
- (14) 『万葉集』と生活環境のかかわりについては折口信夫『折口信夫全集15』や樋口清之「万葉人の衣食住」『万葉集講座第2巻 思想と背景』などが研究している。
- (15) 万葉集巻5
- (16) 久松潜一、1976、『万葉秀歌』講談社
- (17) 中西進、1995、「古代人の自然観」伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社
- (18) 中西進、1995、「古代人の自然観」伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社
- (19) 1998、『広辞苑』第5版、岩波書店
- (20) 1998、『岩波哲学・思想事典』岩波書店
- (21) 瀬古確、2009、『日本文学の自然観照』右文書院
- (22) natureにも「自ずと」の意味が入っているが、これは春になると新芽が生えてくるということは自然（しぜん）であるの意味である。本稿や筆者の考える全てを受け入れるという「おのずから」の意味としては違いがあると思われる。
- (23) 本居宣長、1968、『本居宣長全集』第9巻、筑摩書房
- (24) 家永三郎、1997、『家永三郎集第1巻』岩波書店

■参考文献

- 安田政彦、2013、『災害復興の日本史』吉川弘文館
- 谷川健一編、2013、『地名は警告する』富山房インターナショナル
- 荒川秀俊・宇佐美龍夫、1985、『日本史小百科22 災害』近藤出版会
- 岳真也、2013、『今こそ知っておきたい「災害の日本史」』PHP 研究所
- 久松潜一、1976、『万葉秀歌』講談社
- 岸本英夫、1961、『宗教学』大明堂
- 阿部猛、1995、『万葉びとの生活』東京堂出版
- 市村宏、1977、「万葉人の食生活とその歌」『万葉人の生活と文化』笠間書院
- 川崎康之、1973、「万葉集の時代的背景」久松潜一編『万葉集講座第2巻 思想と背景』有精堂
- 樋口清之、1973、「万葉人の衣食住」久松潜一編『万葉集講座第2巻 思想と背景』有精堂

- 堀一郎、1963、『宗教・習俗の生活規則』未来社
- 櫻井満、1995『万葉集の民俗学的研究』おうふう
- 宇治谷孟、1992、(下巻のみ 1995)『続日本紀 全現代語訳 上中下』講談社
- 柳父章、1995、『翻訳の思想—「自然」と NATURE』筑摩書房
- 中西進、1995、『古代人の自然観』伊東俊太郎編『日本人の自然観』河出書房新社
- 瀬古確、2009、『日本文学の自然観照』右文書院
- 本居宣長、1968、『本居宣長全集』第9巻、筑摩書房
- 家永三郎、1997、『家永三郎集第1巻』岩波書店
- 安田政彦、1996、『続日本紀』にみえる地震記事『続日本紀研究』第300号所収、続日本紀研究会
- 高田知紀・梅津喜美夫・桑子敏雄、2012、『東日本大震災の津波被害における神社の祭神とその空間的配置に関する研究』『土木学会論文集 F6 (安全問題)』vol.68, no.2、土木学会
- 黒木幹夫、2000、『自然について』『愛媛大学法文学部論集人文学科編』vol.9、愛媛大学法文学部
- 正木晴彦、1996、『日本人の自然観と環境倫理』『長崎大学教養部紀要人文科学篇』vol.37, no.2、長崎大学教養学部
- 星野勉、2014、『無常 (mujo) 日本の風土と宗教意識』『国家アイデンティティと宗教』法政大学国際日本学研究所
- 太宰幸子、2013、『自然災害と地名地震と津波から』谷川健一編『地名は警告する』富山房インターナショナル
- 東海林克也、2014、『神仏習合思想の成立と展開』立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科 修士論文
- 1998、『広辞苑』第5版、岩波書店
- 1998、『岩波哲学・思想事典』岩波書店